

林 瑞蘭 学位(博士)請求論文審査報告書

論文題目：中国仏教における天台と三論の比較研究

本論文は、中国仏教における天台学派と三論学派との教学上の同異を比較研究するものである。天台学派の中でも天台教学を樹立した天台大師智顛(538～597)と、三論学派の中でも三論教学を大成した嘉祥大師吉蔵(549～623)とを取り上げ、両者の共通性やそれぞれの特色について明らかにすることを目的としている。

天台大師智顛は中国天台宗の開創者である。ただし師系においては北齊慧文・南岳慧思に続いて第三祖とされている。南北朝期に興隆した多くの仏教学派の思想を統一し法華円教を中心とした仏教の体系を打ち立てた。度者千余人、付業三十二人、著書三十余部と伝えられている。著書のほとんどは弟子の章安灌頂が筆録したものである。

嘉祥大師吉蔵は三論の教学を大成した学僧である。三論とは龍樹の『中論』『十二門論』と提婆の『百論』とをいい、『般若経』所説の空思想を論じたものである。三論教学は僧詮・法朗等によって伝えられ、法朗の弟子である吉蔵によって大きく飛躍を遂げた。法朗までを古三論、吉蔵以後を新三論と称して区別される。吉蔵は多くの経論を講説し、『法華経』『華嚴経』『維摩経』等に関する多数の注疏を著した。このうち二十六部が現存している。

両大師の思想は中国仏教のみならず日本仏教にも大きな影響を与えた。智顛の教学は伝教大師最澄によって将来され日本天台宗が開かれた。吉蔵の教学は入唐僧によって日本にもたらされ南都六宗の一として隆盛した。

本論文は、序論、本論五章、結論で構成されている。

序論は四項から成る。第一項「問題の所在」では、中国仏教思想史上における智顛と吉蔵との位置付けを確認し、仏教界に大きな影響を与えた両者の教義的特色を検証してその同異を明らかにすることの必要性を指摘する。第二項「中国仏教史上における智顛・吉蔵の時代の概観」では、諸先行研究に立脚して、廃仏と復興、儀礼と仏教、道教と仏教、諸宗派の成立などの問題を指摘し、梁・陳・隋にかけて活躍した天台大師智顛と隋から唐初にかけて活躍した嘉祥大師吉蔵の時代背景を概観している。第三項「先行研究について」では、近年の研究者による一連の研究報告をあげ、その内容を解説している。第四項「智顛と吉蔵の事蹟」では、灌頂の『隋天台智者大師別伝』や道宣の『続高僧伝』などの基本的伝記本に基づき、先行研究を参照しつつ天台大師智顛と嘉祥大師吉蔵の事蹟を辿っている。

本論の第一章「智顛と吉蔵の仏性説」は二節から成る。第一節「吉蔵の仏性説－智顛との比較において－」では、吉蔵の五種仏性説について検討し、吉蔵の仏性説は中観思想に基づくものであり、その中心は中道仏性たる正因仏性で

あるとし、智顛の三因仏性説との相異点を明らかにしている。第二節「草木成仏説における天台と三論との同異」では、両者共に空観に基づいて依正不二を立て、有情非情不二相即の論理から草木成仏を主張したが、智顛は三諦円融思想により有情と非情の区別がないことから草木成仏が成立し、吉蔵は草木には心がないために現実的には成立しないことから草木成仏は理論のみに止まった、としている。

第二章「智顛と吉蔵の經典観」は二節から成る。第一節「智顛と吉蔵—經典観を中心とした両者の比較—」では、両者が『法華経』と『涅槃経』を重視することは共通しているが、智顛が五時八教の教判を立てて『法華経』を中心とする立場を取ったことに対し、吉蔵は諸大乘經典は「顕道無異」（道を顕すに異なり無し）であるとした、とする。また、四悉檀においては、智顛が衆生教化の方法として実践的に解釈するに対し、吉蔵は經典解釈の方法として捉えている、とする。第二節「吉蔵の經典観—天台との比較を通して—」では、前節で触れた吉蔵の「顕道無異」についてさらに検討を進め、基本的には諸經典において優劣を認めない立場を取っていることを確認している。このことは智顛が仏の説法を五時に区分し、化儀四教・化法四教を立てて法華経を純円としたことと大きく異なる、としている。

第三章「天台と三論の『涅槃経』『法華経』解釈」は三節から成る。第一節「章安灌頂と吉蔵の『涅槃経』解釈の比較」では、灌頂の『涅槃経玄義』と吉蔵の『涅槃経遊意』とを比較し、その関係性を検証している。灌頂は吉蔵の『涅槃経遊意』を参照して『涅槃経玄義』を著したとし、自説と異なる場合は「有る人言わく」として批判し、自説と同じである場合は文言に多少の変更を加えながら依用している、としている。第二節「『涅槃経遊意』に見える吉蔵の仏性説」では、吉蔵は『涅槃経遊意』において『涅槃経』を六段に分けて解釈しているとし、そのうち仏性説については「明用段」の中の「照鏡の用」において、「本有」「始有」を論じるなかで諸師の説を批判的に論評しつつ自説を表明している、としている。検討の結果、吉蔵は、仏性解釈における「本有」「始有」を方便として否定し、中道に立脚した「無得正観」による仏性説を立てている、としている。第三節「智顛と吉蔵の『法華経』解釈—「小善成仏」に対する解釈の異同—」では、『法華経』方便品所説の小善成仏について、智顛と吉蔵の解釈上の異同を検討している。智顛は、教・行・人・理において一と説いて人天乗における小善にも成仏があるとし、これをさらに三因仏性説によって解釈を示している、とする。吉蔵は、小善成仏を智顛と同様に人天乗の修行としたが、成仏の「遠縁」「遠乗」と表現しているように、重要性は認めていない、としている。

第四章「光宅寺法雲と智顛・吉蔵の関係」は二節から成る。第一節「吉蔵による光宅寺法雲批判—吉蔵の法華注疏を中心に—」では、吉蔵の法華経注釈書である『法華玄論』『法華義疏』『法華統略』『法華遊意』などにおける光宅寺法雲批判について検討し、その主な論点は因果説と仏身無常説であると指摘している。吉蔵は、光宅寺法雲の因果説は寿量品の仏の寿命の無量が明かされ

ていないために不十分であり、同じく光宅寺法雲の仏身無常説は寿量品の仏を神通延寿にして無常としていることを批判し、寿量品の仏は無生滅にして寿命は無始無終であると主張している、と論じている。このことから、吉蔵は、『法華経』は『涅槃経』と同様に仏性と仏身の常住が説かれているとの見解に立っていたとし、『法華経』と『涅槃経』に優劣を説かない吉蔵の教学の特色を示すものであるとしている。第二節「天台智顛より見た三論」では、『維摩経文疏』『維摩経玄疏』『四教義』『三観義』などの智顛の著作中に見られる三論についての言及部分を抽出し検証している。その結果、智顛が三論に言及しているのは最晩年の『維摩経』の注釈書関係のものに限られていることから、智顛の三論批判が明瞭になるのは晩年になってのことと推測している。また、文中で紹介されている『維摩経』の解釈論が詳細にわたることから、吉蔵よりも前の三論学派の講説録か注釈書などが存在していた可能性がある、としている。

第五章「智顛と吉蔵の実践修行論」は二節から成る。第一節「智顛の三種止観」では、『次第禅門』『六妙法門』『摩訶止観』の検証をとおして智顛の実践法門について明らかにする。智顛は、『次第禅門』には漸次止観、『六妙法門』には不定止観、『摩訶止観』には円頓止観を説き、禅波羅蜜や止観によって仏教の禅法を体系付けた、としている。第二節「天台と三論の同異——一心三観と無所得正観——」では、智顛は三種止観のなかでも円頓止観を究極の禅法としたがそれが一心三観であり、それに対し吉蔵は三論教学の究極を中観思想の基調をなす無所得正観とした、とする。無所得正観は空観の実修によって有所得心を空寂に帰すことである。ところがその具体的実践とその理論を示した著作が吉蔵には無い、とする。このように仏道実践において、智顛は多くの書物を著し論理的体系を示したが、吉蔵にはそれが見られないことが両者の相異点であり、それに対して、修道の本質である空性の体得ということにおいては両者は共通している、とする。

結論では、天台大師智顛と嘉祥大師吉蔵との間には次の点において相異点と共通点があるとしている。

両者の相異点はほぼ次のとおりである。①仏性説においては、吉蔵は中道仏性たる正因仏性であるが、智顛は三因仏性を立てて実践修行を重んじた。②草木成仏説においては、吉蔵は空観に基づいて依正不二により成仏を説くが草木には心が無いゆえに現実性が無く、智顛の説は三諦円融思想によっていることから成仏が可能である。③四悉檀においては、智顛が衆生教化の方法として実践的に解釈するに対し、吉蔵は経典解釈の方法として捉えている。④経典観においては、吉蔵は「顕道無異」の立場から諸経典は同じとし、智顛は五時八教の教判を立てて法華経至上の立場を取った。⑤小善成仏においては、吉蔵はそれほど価値を見出していないが、智顛は人天二乗も菩薩であるから成仏できるとして積極的に意義付けた。⑥仏道の実践修行においては、智顛には多くの文献資料があるが吉蔵には無い。

両者の共通点はほぼ次のとおりである。①空観に基づいて仏教を見ている。②『法華経』と『涅槃経』を重視している。③光宅寺法雲の『法華経』解釈に

ついて批判している。

以上の結論を踏まえ、最後に、吉蔵には多くの法華経注釈書があることから、それらを詳細に検討し総合的に集約していくことの必要性を指摘し、今後の課題としている。

以上、本論文は、教観相資の仏教体系を樹立した天台大師智顛と、『般若経』の空思想に立脚した三論の教学を大成した嘉祥大師吉蔵の思想を比較し、その共通点と相異点とを明確にすることによって、両者の特色を明らかにしたものである。天台大師智顛と嘉祥大師吉蔵には膨大な撰著があるため、総体的に研究を進めるにはなお、さらに多くの時間と努力を必要とする。本論文は日本語の誤記や表現の不適切な箇所、検討が不十分な点があるなどの瑕疵が見られるが、それらは本論文の功績を大きく損なうものではない。本論文は、先行研究に導かれながら、主要な諸点において両大師の教学を捉えその特色を明確にした。両大師の仏教思想史上における功績は絶大なものがあることから、その思想的特色を明示したことは、仏教研究史の上からも意義がある。その点は本研究の成果と言えよう。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成29年1月20日に公聴口頭試問をおこない、論者の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応すると審査委員会は判断し、これを認定する。

平成29年2月8日

主査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 庵谷行亨

副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 高橋堯英

副査 国際仏教学大学院大学仏教学研究科
教授 藤井教公